

春秋彩

Syunjusai

特集

「グローバル社会に向けた人材育成—大学の役割」…2

活躍する卒業生	7
国際交流	8
研究活動紹介	10
大学の動き	12
INFORMATION	13
生き生き元気種	14
おすすめの1冊	15



 熊本県立大学

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学風の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2012 AUTUMN

vol. 37



理事長
五百旗頭 真

若き日の出会いほど、人の生涯にとって大きなものはない。諸君はこのキャンパスで友と出会い、先輩・後輩と出会い、先生とその授業科目に出会う。

数多くの出会いの中で、君自身もこれまで気づかずにいた自分を呼び起こす出会いがある。自分のうちに眠っていた自分がスイッチONになり、新しいテーマを持った人生が始まる。

個々の出会いをくぐる熊本という地との出会いもまた大きいのではないか。

私自身、今年熊本に来て、まずこの地の自然の豊かさ、重厚さに魅了された。なんと豊かな水と土壌か。そこに育つ樹木のホリの深さ、作物の多様と豊饒。他方、豪快な自然は7月12日に阿蘇の外輪に爪を立てていくつもの傷跡をつくり、白川の大氾濫で熊本市民を沈める寸前まで来た。

熊本県立大生は深い愛郷心を持つ。この地の食材で高校生とともに新しいレシピを開発し、和水町で里山再生にあたり、阿蘇の被災地にボランティアする。県内の多くの地域と提携し、新しい地域づくりに参画する。

郷土を愛する諸君の姿こそ、私にとって感銘深い熊本との出会いである。今、有明海のむこうの東シナ海は波高い、視野狭小なナショナリズムは20世紀と同じく21世紀の日本も減ぼすかもしれない。それとは似て異なる郷土愛に深く根差した愛国心(patriotism)、そして他者のそれにも敬意を払う健全なナショナリズムこそ、この時代に不可欠ではないか。

グローバル社会に



社会が求める大学教育

熊本県立大学は今年、創立65周年を迎えます。熊本県立女子専門学校、熊本女子大学から引き継いできた歴史と伝統の上に、熊本県立大学としての16年の歩みを重ね、これまでに15,600名の卒業生を世に送り出してきました。多くの卒業生の皆さんが熊本地域に限らず、九州各地、全国、そしてグローバルの場面でも活躍しています。最近では熊本県立大学出身の若者が国際舞台でも堂々と活躍しています。

我国の企業等に余裕が失われてきたせいも、大学教育に対する要望は年々高まって来ています。以前は「必要な教育は社内で行うので出来るだけ白紙のままで…」といった声も聞かれましたが、初等中等教育の評価は抜きにして、「大学教育の実質化、質保証、即戦力、社会人基礎力、いやコミュニケーション能力こそが…」等、大学教育で修得すべき能力について様々な議論が続けられています。



向けた人材育成—大学の役割



熊本県立大学の人材育成

本学は「豊かな教養と高度な専門性を有し、総合的な知識と実践力、創造力を育成する」を人材育成の目的に掲げ、自然科学、人文科学、社会科学を学問領域とする三学部横断型教養教育を展開しています。また、全ての学部に通じる大学院博士前期および後期課程を有し高度専門職業人の養成にも力を入れているところです。学部教育においては、地域課題解決型教育の展開をはじめ、社会からの様々な要望も取り込んだキャリアデザイン教育の充実をはかり、寡黙で頑固な「肥後もっこす」の多様性、社会適応性の向上をめざしています。



グローバル社会に対応した人材育成

社会のグローバル化に伴いグローバルスケールで活躍する人材の育成が急がれています。グローバル人材に求められる素養として、確かな自己のアイデンティティを持ち、幅広い教養と高い専門性、異なる言語や文化を理解する力、コミュニケーション能力、協調性、創造性、社会貢献への意識などが挙げられています。これらの能力は人生のあらゆる場面で積み重ねられて行くものだと考えます。本学の学生には、常に向上心と学びの心を持ち、活躍する場が地域社会であっても、あるいは国際社会であっても自国や世界の文化や歴史を理解し、さらには人の幸福、不幸を共有できる心の優しい人であって欲しいと願っています。

(学長 古賀 実)



思えば遠くへ来たものだ

文学部 日本語日本文学科 教授 馬場 良二

振り返ってみると、420名以上の学生を教育実習に送り出してきたことになる。

本学の日本語教師養成課程は、1988年に開設された。授業そのものは2年生からで、私は開設の翌年の1989年に赴任してきた。

赴任してきた年に韓国の祥明大學校との姉妹提携の話が持ち上がり、翌年の5月には調印のための訪問団にくわわって渡韓した。当時はバブルまっただ中で、国際交流事業が盛んにおこなわれていた。

おかげで、第1回の教育実習から本物の日本語学習者を相手に授業ができることとなった。1995年からは、6月から7月にかけてやってくる韓国祥明大學校からの短期研修団のための日本語教室を大学院生の実習の場とするようになった。姉妹校との関係も次第に深まっていく。

1997年には、八代の青年会議所の招きで中国の広西大学の教授が熊本に来ていた。3か月の研修期間中の3週間を本学で過ごし、それが縁で翌年から広西大学への実習生の派遣が始まった。

2000年からは2年生から実習に参加できるようになり、参加者の人数が増えた。この時から、2年で中国、3年で韓国、4年で国内ということが可能になった。

タイ国ワライラック大学は本学卒業生の紹介、米国の大学と高校は英文科の先生が仲介をしてくれた。フィレンツェ大学は、メールアドレスの一部を「italia」としてある学生にすすめてみたら、自分で受け入れ大学を探し、交渉し、行ってきた。コンクーン大学は、本学の修了生が働いていた。

台湾に行きたいという学生がいたので、知り合いにたのんで受け入れてもらった。トルコの大学と本学との間では、日本語学科のニュースレターと日本語教育研究室の報告集とのやりとりがあった。そのご縁で2010年から実習団を受け入れていただいている。

いつの間にか、派遣先の国と地域は七つになった。海外で実習をした学生は285名だ。卒業、修了後は韓国、中国、タイ、台湾、アメリカ、イギリス、トルコなど世界各国で活躍している。

が、派遣してきたのはグローバル人材を育てるためではない。日本語教師を養成するための。今年は、韓国、台湾に5名、トルコに3名、中国に1名が行く。そこに日本語を学ぶ人がいて、私たちを受け入れてくれる機関があるからだ。

回数	年度	派遣先							年度別計				
1	1990	韓国 祥明大學校短期研修団							11名				
2	1991	黒髪小学校							12名				
3	1992	韓国 祥明大學校							16名				
4	1993	中国 広西大学							8名				
5	1994	タイ国 ワライラック大学							14名				
6	1995	4名	台湾 海南大學						19名				
7	1996	若干名	トルコチャナッカレオンセキスマルト大学						12名				
8	1997	米国 モンタナ大学							11名				
9	1998	イタリア フィレンツェ大学							5名				
10	1999	5名	2名	米国 マレー高校、キャロウェイ高校					7名				
11	2000	7名	2名	4名	タイ国 コンクーン大学				26名				
12	2001	6名	8名	7名					21名				
13	2002								17名				
14	2003	6名	6名	8名	5名				25名				
15	2004	6名	7名	5名	2名	7名				27名			
16	2005	7名	4名	4名	2名	4名				21名			
17	2006	3名	8名	5名	4名	4名	2名			26名			
18	2007	6名	5名	3名	5名	2名	1名			22名			
19	2008	5名	3名	8名	5名	2名	1名			24名			
20	2009	10名	11名	8名	3名					32名			
21	2010	8名	5名	6名				5名	2名	3名	29名		
22	2011	10名	3名	6名				3名	3名			25名	
学校別計		83名	52名	189名	52名	24名	8名	5名	2名	1名	1名	3名	420名



韓国祥明大學校の歓迎会



タイ国ワライラック大学の正門

「世界に伸びる」推進に向けて

環境共生学部 環境資源学科 教授 篠原 亮太

熊本県立大学は、「地域に生き、世界に伸びる」を合い言葉に、様々な分野で地域連携と国際交流活動を展開しています。海外の大学との学術交流は、韓国、中国、台湾、米国を中心に進められていますが、これまでの所、学生諸君が卒業後直ちに国際的現場で活躍することには結びついていません。多くの卒業生が、自分の専門を活かし、海外に飛び出してこそ「世界に伸びる」本学の理念を具現化していくことになるのです。中でも国際協力や国際ビジネスの展開は、世界との貿易に活路を見出している我が国には避けて通れない課題なのです。

我が国は戦後の混乱期を乗り越えて驚異的な経済発展を遂げ、その成果は「アジアの奇跡」とまで呼ばれてきました。また、資金不足、人材不足、経験不足などによって経済発展が遅々と進まぬ開発途上国からは、豊富な経験と技術を持つ日本に対し大きな期待が寄せられています。開発途上国を訪問すると、日本の支援やビジネス提携を要請されることがしばしばです。しかしながら、我が国には、国際的フィールドで仕事ができる潜在的人材は十分にいると思われませんが、現実には活躍できる人材はまだ十分ではありません。なぜなら、専門性は十分であっても国際協力や国際ビジネスのあり方や

進め方、いわゆるグローバルセンスを磨くチャンスが本学を含め全国の大学には一部の国際関連学部を除いて、十分に整備されていないからです。

国際協力の取りかかりの1つに、青年海外協力活動がありますが、このプログラムに参加するには、専門分野において3年の実務経験が求められます。大学院修了の場合は、もう1年の実務経験が必要となるのです。さらに、国際協力専門員になるためには、実務経験の他外国語、特に英語能力が要求されます。このような公的機関以外にも国際協力を目的としたNPOなどに所属し、草の根的活動をしている人々もいます。また、中小企業であっても国際ビジネスに参入を試みている例もたくさん見ることができます。このように国際的フィールドでの活動には様々な形態やルートがありますが、実際に参加する場合にはそのきっかけが必要です。卒業後の進路を模索する具体的な活動として、企業インターンシップが行われていますが、国際的活動を体験できる機会として「国際機関でのインターンシップ」を本学でも積極的に取り入れてはいかがでしょうか。世界を舞台に、ビジネスや協力活動をしてみたいと感じる熱意ある若者の育成に繋がるのではと考えます。



写真は2012年9月台北科技大學との学術研究会

「グローバル人材」—私はこう思う

総合管理学部 総合管理学科 教授 高埜 健

海外に行ったことのある人の多くが、おそらく、

“You, Chinese? Korean?”

(「あなた中国人? 韓国人?」)

などと訊かれた経験があると思う。

そこで、あなたは “No, no, no, I am Japanese.” と答える。相手が土産物屋の店員なら、「Oh! ホンダ、ニンテンドー、スシ、NARUTO!(最近これが大人気)」などと言ってくるだろう。あなたは気を良くして必要以上に土産物を買ってしまうかもしれない。



2008年12月、マレーシアのマルチメディア大学で熊本についてのプレゼンテーションをする本学学生

しかし、より知的水準の高い大学生や、「アニメ」以上の関心を持っている人からは、

「近年、日本の総理大臣はコロコロ変わるが、どうして?」

「日本の経済は今状態が良くないようだが、原因は何なの?」

あるいは、今なら、

「韓国や中国と領土問題で揉めているようだが、あなたはどう思う?」

などと訊かれるかもしれない。さあ、あなたはどう答える(しかも外国語で)。



2007年9月、香港大学

「グローバル人材」というと、まず、高い専門性を持ち、外国語(とくに英語)の運用能力とコミュニケーション能力に長けている人、幅広い視野を持ち異なる文化や価値観を理解でき、それゆえに国内外に広範なネットワークを持っている人、というようなイメージではないか。但し、世界がグローバル化するという事は、ますます多様な文化的背景を持つ人びとがモザイク型に交じり合っていくということである。遠い将来はわからないが、多様な文化がすべて融合して、まったく新しい「地球文化」のようなものができるわけではない。

だから私はもう一つ付け加えたいし、また、とくに強調したい。それは、日本に対する強い誇りとアイデンティティを持ち、日本のことを語れ、発信できる能力を持つ、ということだ。要するに、正体不明の「無国籍人」あるいは「デラシネ」(根無し草)になってはダメだということだ。



2010年12月、カンボジア王立プノンベン大学における本学学生との交流会

私はこれまで、「グローバル人材」の養成に少しでも役立つようにと、本学学生を海外、特にアジア諸国に連れ出してきた。

一歩海外に出れば、中国人、韓国人となんら変わらない顔付きの私たち。グローバル化する現代では、国内に居たってナニ人なのかの区別はますますつきにくくなっていく。グローバル人材を目指す人こそ、日本のことをもっと勉強して下さい。日本のことを訊かれたら、ブロークンでもいい——上手いに越したことはないが——今や世界標準言語となった英語で堂々と説明し、議論できるようにして下さい。

活躍する卒業生

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、
現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。

国際情勢や海外事情など
世界について精通。
貴重な大学生活の時間を有意義に。



株式会社エイチ・アイ・エス勤務

緒方 綾乃さん

Profile

文学部 日本語日本文学科卒
平成23年4月 (株)エイチ・アイ・エス入社

現在の仕事内容

私は現在、株式会社エイチ・アイ・エスという旅行会社でオペレーターとして働いています。個人旅行や学生旅行から家族旅行、ハネムーンなど様々なお客様を相手に、旅行の手配から帰国までお手伝いをさせて頂く、とてもやりがいのある仕事です。お客様の大事なご旅行を扱う仕事なのでもちろん旅行が好きというだけでは務まらない大変な事もたくさんありますが、より多くの人々に旅行の楽しさを知ってもらいたい、旅行に行き見識を高めてもらいたいという気持ちを持って働いているので、お客様に旅行を楽しんで頂けるとやりがいを感じ、仕事の喜びにつながっています。

また弊社で取り扱っている旅行の8割が海外旅行の為、国際情勢や海外事情など世界について精通してないといけません。世界中で起こっている出来事は常に把握し、旅行中もただ楽しむだけではなく仕事に生かせる知識を得る為、常にアンテナを張って旅行しています。そういった点では私にとって旅行会社での仕事は、自分の趣味を仕事に生かすことができる適職だと思っています。

学生時代・大学で学んだこと

在学時は海外に興味を持ち、長期休みの際は必ず海外旅行に行っていました。1か月近く海外で過ごすなど、時間がある学生時代にしかできないことができました。大学時代は自分の好きなことを見つけ、それに時間を費やすことのできるとても貴重な時間だと思います。私の場合は大学時代の旅行の経験が今の仕事に大変役立っており、時間のある大学生のうちに様々な国に行き、色々な経験をしてにおいて本当に良かったと痛感しています。

また日本語日本文学科では日本文学や日本語について深く学ぶことにより、日本と海外の違いをより感じることができるようになり異文化交流の際に役立ちました。国際間の相互理解を深めることにつながったと思います。

大学生活4年間は長いように思えて、とてもあっという間に過ぎていきます。与えられた自由な時間をどのように使うかによって、卒業後の進路も変わってきます。今やりたい事が分からないという方も多いかと思いますが、興味を持った事が今の私のように自分の将来につながる事もあります。貴重な大学生活の時間を有意義に使って、興味のある事好きな事とことん追求し、自分の進むべき道を見つけて下さい。

国際交流 INTERNATIONAL

～世界を学ぶ、海外と交流する～

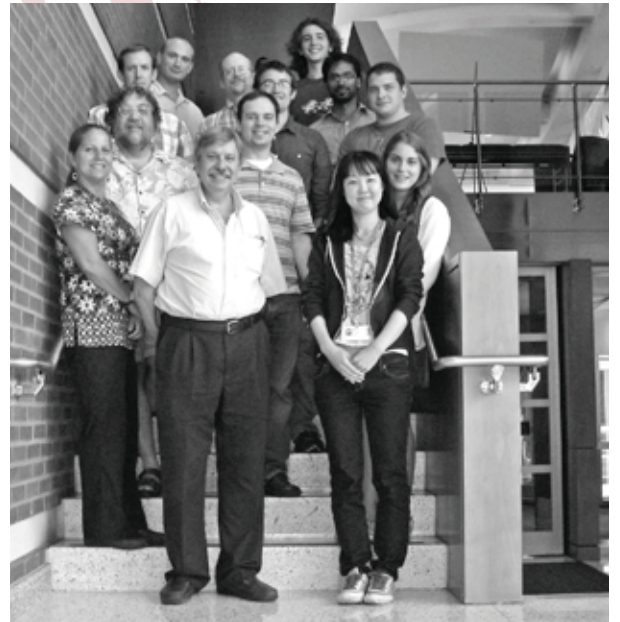
海外研修報告

ヒトの利き手・非利き手の 運動制御特性に関する研究

環境共生学部 食健康科学科 准教授 青木 朋子

米国ニューヨーク州、ロチェスター大学での1年間の海外研修を終え、8月に帰国いたしました。ロチェスターは、五大湖の一つであるオンタリオ湖に面した、人口約100万人の都市です。ロチェスター大学は、1850年創設の私立大学で、特に、医学や物理学、経済学、音楽などの教育プログラムが、毎年、USニュース & ワールドレポート誌の大学ランキング上位に入ること知られています。また、ノーベル物理学賞を受賞された小柴 昌俊 氏が博士号を取得したことも知られています。

私は、今回の海外研修で、ロチェスター大学メディカルセンター内にある神経生物学・解剖学研究科のMarc H Schieber教授のもとで、ヒトの利き手・非利き手の運動制御特性を調べる研究を行いました。Schieber教授のラボでは、指の運動が脳でどのようにコントロールされているのかについて、主に、サルを対象とした神経生理学的研究を実施しています。私は、修士課程の学生だった頃、先生の論文に出会い、新規性に富むアイデアと緻密な実験データ、論理的な考察に感銘を受け、以来、先生の論文をいつも楽しみにしてきたので、今回、先生のもとで研究をできたことは毎日が感激の連続でした。研修開始時点で、先生のラボではヒトを対象としたプロジェクトはなかったので、今回の私の研修で、新たなプロジェクトを立ち上げることになりました。大変ではありましたが、研究の立案や実験装置のセットアップ、実験の実施、データ分析と結果の解釈を、先生やラボの方々とのディスカッションしながら進めることができ、とても多くのことを学ぶことができました。帰国までに無事、実験を終了することができたので、今後は、その成果をまとめられるように、現在、データ分析と結果の解釈を進めています。ロチェスター滞在中は、研究以外でも、先生のお宅でサンクスギビングの七面鳥をごちそうになったり、先生のご家族やラボの皆さんと一緒に独立記念日の花火を観に行ったりと、アメリカならではの貴重な体験をさせていただくことができました。また、今回の研修中に、熊本県立大学赴任前の1年半、博士研究員をしていたペンシルベニア州立大学を久し振りに訪問し、当時、お世話



Finger Movement Labのメンバー。1列目左がSchieber先生、右が筆者。

になっていた先生方にお会いできたこともとてもうれしかったです。帰国前のラボでの送別会では、ロチェスター大学のブランケットとマグカップのプレゼントというサプライズまであり、これらを見る度に、ラボの皆さんのことを思い出すことができそうです。

最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えてくださった熊本県立大学関係各位、不在の間、ご迷惑をおかけしたにも関わらず温かくサポートしてくださいました教職員の皆様、渡米前や研修中に励ましてくれた学生の皆さん、そして、研修を支えてくださったSchieber先生をはじめとするラボの方々へ心より感謝申し上げます。今後は幸運にも得ることができた海外研修の機会です。学んだことを熊本県立大学での教育・研究に活かしていけるように精一杯頑張りたいと思います。



ロチェスター大学「フォトフライデー」に投稿した写真が採用され、ロチェスター大学のウェブサイトトップページに掲載されたときのもの。後ろに見えるのはロチェスター大学の図書館。右はロチェスター大学のマスコット、ロッキー、そして、左はご存じ、くまモン。

世界に伸びる大学を標榜する本学では、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。

その理念をより具体化するため「国際交流ビジョン」を策定し、「学生」「学術研究」「地域」それぞれの視点から全学的に国際交流活動を推進しています。

EXCHANGE

モンタナ留学を終えて

文学部英語英米文学科 4年

松野 由紀

私は、昨年9月から今年4月まで、アメリカのモンタナ州立大学ピリングス校で9ヶ月間本学からの交換留学生として学びました。留学中は、アメリカ人の在學生に混じってアメリカの授業を体験し、授業の予習や宿題に追われたことも多々でしたが、その英語に囲まれた環境の中で自分の英語力を向上できたこと、またアメリカ人やその他国籍を超えて友達を作り彼らと交流する機会を得ることができたことは、生涯の財産となると確信しています。

授業においては、講義を通してのリスニング能力の向上はもちろんのこと、授業の予習・課題・テストへ向けた学習により、日本での学習とは比較できないほどの英文を多読・速読し、レポートも当然英語という英語漬けの中で、英語力を高めることが出来ました。また、英語を術として新しい知識を身につけたり思考したりする訓練が出来たことは、日本では出来ないとても貴重な経験でした。

コミュニケーションに関しては、アメリカ人の学生・他の国からの留学生達と友達になり、色々な話をしたり意見を交換しあうことは、私の視野を広げ、思考を柔軟にしてくれるものばかりでとても良い刺激を与えてくれました。また、留学生同士では活動を共にする機会も多く、故郷を離れて海外で生活をするという同じ境遇の中で感覚を共有し意見を交換し合った彼らは生涯の友であり、彼らと過ごした時間はかけがえのない宝物です。また、親切なホスト



ホストファミリーの家での日本語教室

ファミリーに恵まれ、アメリカの生活・文化・食文化を体験する機会も得ることができました。彼らの誘いで教会を何度か訪れ、教会という信仰の場に行くことで、宗教の違いを肌で感じることができるとともに、彼らの考え方をより深く知る機会となりました。そしてホストファミリーとの生活は、どのようにして彼らの文化を尊重しつつ、その中に自分の生活スタイルを適応させるかを考えることに繋がりました。

その他にも、ホストファミリーの家でホームスクールの子供たちに日本語を教える機会を得たことなど、今回の留学を通して数え切れない程の親切に出会い、数え切れない程の貴重な経験をすることが出来ました。これらの忘れられない素晴らしい経験を今後の人生の糧として、また次なる目標に向けて頑張っていきたいと思えます。



モンタナ州立大学内の様子



世界各国の留学生と近くの山にて

研究活動紹介



総合管理学部 総合管理学科 講師
土居 俊平

Profile

大阪府出身。関西大学法学部卒業、
同大学院博士後期課程単位取得。修士(法学)。
宮崎産業経営大学法学部専任講師を経て、本年4月より現職。

日本マンション学会 「研究奨励賞」を受賞して

平成24年5月26日～27日に開催された、日本マンション学会北海道大会において、日本マンション学会より「研究奨励賞」を受賞しました。研究奨励賞とは、独創性・萌芽性・将来性のある優れた論文に対して今後の研究を奨励すべきと認められた場合に贈られるものです。

受賞という節目に、民法研究者である私の研究活動を紹介します。



学会誌・マンション学。(上は私の論文が掲載された号)

1 区分所有法研究に至るまで

関西大学法学部在学中、不法行為の権威者たる沢井裕教授の民法ゼミに在籍していました。そのため、学部生の頃から民法の不法行為に関心がありました。その後、関西大学大学院博士前期課程への進学が許され研究生活を本格的にスタートしてからも特殊的不法行為の一つである使用者責任(民法715条)につき研究しました。修士論文の審査・外国語試験(英・独の2ヶ国語)を経て博士後期課程への進学を許された頃、関西大学法学研究所にマンション法研究班が設置され、マンション法研究班の研究会に出席することになりました。同研究会では、著名な先生方による最新の区

分所有法上の研究成果に触れる機会を得ました。このことが本格的に(民法の特別法である)区分所有法の研究を行う契機となりました。

2 区分所有者の排除

このように、当初は民法の不法行為に関心があったため、区分所有法研究においてもマンション内における不法行為ともいえる義務違反行為、特に、昭和58年改正で新設された義務違反行為に対する制裁措置(区分所有法57条～60条)に関心をもちました。その中でも、区分所有法59条(競売請求)は区分所有者が迷惑行為をなす場合に最強度の制裁措置として当該区分所有建物から区分所有者を排除するものであり、金銭での紛争解決を原則とする民事法の領域にあっては極めて厳しい制裁措置といえます。そのため、当該制度が濫用されることなく、一方で

濫用を恐れ硬直化した制度とならないように、真に望ましい法制度となるにはどのように解釈・適用すべきなのかを本格的に研究していこうと考えるに至りました。このような基本的認識をふまえつつ、区分所有者の排除について日本法はもちろん、わが区分所有法の母法たるドイツ法・スイス法を素材に研究しました。今後とも、外国法を素材とした正統的な研究手法により研究するつもりです。なお、今回の受賞対象となったのも区分所有者の排除に関する論文でドイツ法を素材としたものです。

3 外国法研究の重要性

ここで、法学研究者にとっての外国法研究の重要性につき一言します。

日本の憲法並びに民法・刑法・商法・訴訟法といった主要な法律は、明治期あるいは戦後に制定 (or 改正) がなされる際、ドイツ法・フランス法・アメリカ法等を参照した上で制定 (or 改正) されたという歴史的経緯があります。更に、法学研究において自らの研究の正当性・妥当性を実験で実証することは事実上不可能です。

そこで、法学研究者は (理系の研究者が研究手法として実験を行うように) 研究手法として日本法の源 (ルーツ) ともいべき外国法 (= 母法) における議論を素材とします。その上で種々の検討を経て自らの見解 (= 学説) を公にします。最近では、母法に限らず広く先進国における法的議論の紹介・検討が行われています。このような外国法研究を行うメリットは新たな発想・視点が得られるという点です。また、外国法研究ができることに法学研究者の存在価値があるとの指摘もあります。外国法研究を行うにあたり、ドイツ・



著名なバーマン・コンメンタールである。条文毎に詳細な解説がなされている

フランス・アメリカ等で出版されている法律専門文献を原語で読みます。そのため、法学研究者は英語以外にドイツ語もしくはフランス語については少なくとも法律文献訳読能力があるのが通常です。学界では、ドイツ法・フランス法・英米法のいずれかを素材としたしっかりした論文が公にされてはじめて研究者として一人前の扱いを受けます。

4 今後の展望

1. 研究面

全国の区分所有法研究者を動員する形でマンションの老朽化・被災等につき外国法研究を基礎とした規模の大きい共同研究が国の研究費 (= 科研費) を利用して行われています。私も当該研究に関与しています。

2. 実務面

家庭裁判所で参与員をしています。具体的には、家庭裁判所に提起される離婚訴訟において裁判官席の横に座り、当事者尋問・証人尋問に立ち会い (場合によれば法廷で質問することもあります)、評議の場で意見を述べています。今後とも、このような裁判実務との関わりも大切にしていきたいと考えています。



五百旗頭理事長特別講演会「東日本大震災と復興」を開催

本学の創立65周年を記念して、今年4月に本学理事長に就任した五百旗頭真理事長による特別講演を9月2日、本学大ホールで、満員の約350人の中開催しました。

五百旗頭理事長は、阪神・淡路大震災を経験、政府の東日本大震災復興構想会議の議長を務め、現在も復興推進委員会委員長を務めています。

それらの経験から、「創造的復興」の必要性など、具体的で分かりやすい復興の考え方を述べ、参加された皆さんは、約2時間の講演を熱心に聴講されました。



阿蘇災害復旧ボランティア活動を実施しました

7月の「九州北部豪雨」により甚大な被害が出た阿蘇市内で、8月9日・10日に、学生・教職員総勢約100名で、民家の土砂排出、土のう袋入れ、床拭き作業など災害復旧ボランティア活動を実施しました。

学生たちの感想は、「テレビで見ると実際に見るとでは大変違いがあり、災害の恐ろしさを痛感した」、「ボランティアリーダーの人が、ボランティアに来た人が無理をすると、緊急の場合地域住民が逃げ遅れることもあり、一方通行の思いだけではいけないという話をしてくれて、被災者のことを一番に考えようと思った」などがありました。今回の経験は自分に何ができるのかを考える機会となったようです。

学生主催による「震災報道新聞展」を開催

6月12日から26日までの2週間、本学図書館において、県内3大学の学生8人で構成する団体「BeeNeT3.11」による「震災報道新聞展」が開催されました。

この新聞展は、東日本大震災が起きた直後の被災地、そして震災から1年以上経った今の被災地を、東北3県の地方紙の展示を通して熊本の学生に伝えたいという主催者の強い思いから、5月下旬から7月上旬にかけて、順次、3大学の図書館で開催されたものです。

本学文学部 坂本愛和さん、総合管理学部 稲葉翔太さん、同 野嶋秀華さんが当団体のメンバーとして参画し、本学における展示を行いました。



熊本県立大学CPDフォーラム開催!

熊本県立大学では専門職業人としての資質能力開発の機会の提供を目的にCPDプログラムに取り組んでいます。

9月8日(土)、今秋以降のプログラム等を県民の皆様に御案内するためCPDフォーラムを開催しました。

自治体・団体職員、看護職員、地域づくりやブランドづくりに興味のある方など約80名の参加者を迎え、中宮光隆熊本県立大学名誉教授の基調講演やプログラム担当教員からの講座紹介に加え、フロアとの活発な意見交換も行われました。

熊本県立大学創立65周年記念国際シンポジウム

「東アジア地域の共生的発展に貢献するグローバル人材の育成」を開催します。

熊本県立大学創立65周年記念事業の第2弾として、東アジア地域の発展に積極的に貢献する国際感覚に優れたグローバル人材の育成に関する国際シンポジウムを開催します。

シンポジウムでは、協定校である米国のニュージャージー州ラトガース大学等から研究者を招聘し、中国、インドの進展等により国際社会の関心が高まっている東アジアの現状を踏まえ、これからの地域の在り方、共生的発展方策、米国をはじめとする諸国の役割について議論します。また、複雑かつ急激な変化を遂げる国際社会の中で、日本、そして熊本の果たすべき役割を明確にし、熊本県立大学におけるグローバル人材の育成に向けた教育プログラムの再構築を目指します。

■日時／平成24年11月17日(土) 13時～17時

■場所／熊本県立大学 大ホール

■内容／【記念講演】「アジア太平洋の激動と共生」講師：五百旗頭真 理事長
【基調講演】「グローバルな高等教育における課題」
講師：David Finegold氏(ラトガース大学上級副学長)

【パネルディスカッション】グローバル人材育成に向けて—現状と課題—
パネリスト：

Nith Bunlay氏(カンボジア教育青年スポーツ省高等教育局副局長)
胡憲倫氏(国立台北科技大學環境工程與管理研究所教授)
他本学教員

●お問い合わせ先 熊本県立大学企画調整室 TEL.096-321-6604

文学部フォーラム

「文学は生きているか?—断崖に立つ文学研究—」を開催します

かつて全盛を誇った「国文学」「英文学」も、今日ではすっかり色褪せてきました。もはや「英語」は掲げても、「英文学」を看板に掲げる学科は限られ、「国文学」も一部は「日本文化」に衣替えし、学科そのものの消えた大学もあります。

そもそも大学に文学研究は必要なのか、教育として「文学」を教える意義はあるのか、必要ならそれは何故か、研究者はそれを自身の責任において語れるのか。

文学部危機の時代にありながら、長らく誰も問うてこなかったテーマに敢えて切り込み、大学教育の今と文学研究の未来に向けた一石を投じることを目的として、公開シンポジウムを開催致します。

■日時／平成24年12月8日(土) 13時半～16時

■場所／熊本県立大学 中ホール

【パネリスト】石原千秋 氏(早稲田大学教授)

平野有益 氏(熊本日日新聞社新聞博物館長)
他本学教員

●お問い合わせ先 熊本県立大学文学部日本語日本文学科資料室 TEL.096-383-2929(内線428)

後援会便り

平成23年度 共同自主研究成果発表会の開催



(発表者：東グループ「徳富蘇峰の書簡調査及び目録の作成」)

後援会では、学生の自主性・創造性を育てるとともに、学業と社会や地域との関わりを深めるため、学生グループが自らの問題意識に基づき企画した研究に助成しています。昨年度は10グループの助成を行い、今年5月に研究成果発表会を開催しました。それぞれに水準の高い発表があり、参加した学生も真剣に聴講していました。

後援会とは

- 本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

後援会の事業 次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座(公務員試験対策講座、就職試験対策作文講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士講座、簿記講座等)を開催
- 適職診断プログラムの実施、各学部による就職支援事業への助成、OB・OGと連携した就職支援事業の展開等

《学生活動支援事業》

- 各サークルの活動費の一部、全国大会出場経費等の一部を助成
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し、図書館へ配置等

※途中年次であっても随時入会を受け付けています。後援会事業をご理解いただき是非ご加入ください。

《国際化推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じた渡航経費の一部を助成
- 留学対策講座の開催等

《教育研究助成事業》

- 学生共同自主研究助成
- 国内学生大会等出場助成等



このコーナーでは、サークル活動をはじめ、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。



鹿里の棚田



保坂 峻平



漆島 れいら

「とびだせ！星の探検隊！お茶の子彩々、鹿里組」

大学1年の時、それまで聞いたこともない田舎に飛び出し、タイトルにある日帰り稲刈り体験プログラムに参加しました。このプログラムは、標高350mにある18世帯約50名が住む集落、福岡県八女市星野村鹿里(3くり)地区で行われているものです。

初めて鹿里地区を訪れた時、私達は石積みのきれいな棚田や自然に魅了され、それ以上に地域の皆さんの「この集落をどうにかしたい」という熱い声や団結心に惹かれ、大学生の間、この地域で活動していこうと決めました。それから2年！今もキャンプの運営・管理を手伝いながら、祭りの手伝いであったり、集落の歌を使ったプロモーションビデオ作成やホームページ作成と情報発信を手伝ったりと、大学で得た知識を活用して集落おこしに取り組んでいます。



「シュレックFarm」産大根の販売(彼岸花祭り)

「シュレック、今日はなんばしよるの？そげん、がまだして。」と声をかけられ、「はい、大根の種は時きよります！」とやり取りするのが私の週末の日課です。私は、鹿里ではキャンプ時のニックネームである「シュレック」と呼ばれ、民泊しながら週末農家をやっています。「シュレック Farm」という畑を持ち、ここで野菜を栽培しています。畑自体は地域の方に石積みの棚田の一部を借りているものです。

「コラッ！そげな種の時き方じゃ日が暮れるばい。どらっ、こげんして…よーら時かなんたいっ！」種の時き方、時き時期、土の管理、害獣対策、収穫時期、畑にいたら自ずと見に来てくれる地元の方は、私にとって色々な課題を与えてくれる先生です。地域の方々と一緒に、農業を楽しみつつ、集落を元気にする活動を行っています。

総合管理学部3年 保坂 峻平

「れいら、今年も頼んどくけん！おもしろか司会期待しとるよ。」と地域の方から彼岸花祭りのお願いが届きます。毎年9月下旬鹿里地区では例年、「鹿里棚田の彼岸花祭り」が開催されます。

祭りが近くなり、私が集落を歩いていると「去年みたいな、シュレックとのおもしろか掛けあい期待しとるよー」とよく地元の方から声をかけてもらい、祭りの当日も「このプログラムを進めていってくれんね。残りは2人に任せとっけん。」と、司会のほとんどを任せて頂きます。

今年は、7月に発生した九州北部豪雨で甚大な被害を受けた後の祭りとなりました。その中で、鹿里の自然と人の暮らしに焦点を当てた司会を行い、去年以上ににぎわった彼岸花祭りとなりました。

総合管理学部3年 漆島 れいら



今年の彼岸花祭りステージイベント



鹿里での田植え体験

熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

～今後ともよろしく願います～

熊本県立大学では、教育研究環境の充実を図り、地域社会に貢献する有為な人材の育成及び優れた研究成果の創設に資することを目的に、「熊本県立大学未来基金」を設置しております。

平成21年9月の基金設立から平成24年3月までのキャンペーン期間に、個人337人、12法人・団体等の皆様から総額89,872,255円のご寄付(申し出分含む)をいただきました。皆様のご協力で改めまして厚くお礼申し上げます。

基金により、本学では、新たに「西部電気工業奨学金」「同窓会紫苑会奨学金」を創設し、学業・人物ともに優れ、かつ経済的理由により修学が困難な学生に対する支援を行っています。

また、卒業生はもとより、広く県内の企業、団体等で働く社会人を対象に、学び直し・学び直しなど専門職業人としての資質能力開発の機会を提供するため、県民や社会に開かれた施設として「熊本県立大学CPD(継続的専門職能開発)センター」を開所し、より一層地域に根差した公立大学としての価値向上を図っています。

キャンペーン期間は終了しましたが、今後も基金事業の更なる充実を目指し、恒常的寄附金募集事業として継続して募集いたします。今後とも、基金設置の趣旨にご理解とご協力を賜り、「地域に生き、世界に伸びる」熊本県立大学に特段のご協力、ご支援をお願い申し上げます。



平成22年11月8日奨学金決定通知書交付式



平成23年10月26日CPDセンター開所



おすすめの1冊

リーダーズ英和辞典 第3版

研究社、2012年



文学部英語英米文学科
准教授 坂井 隆

最近、眠れない夜は、英語辞書を「読む」ことにしている。ミステリー小説を読みだすと、真相が解明されるまで読み続け、結局、徹夜することになるし、純文学物を読むと、職業柄、分析の対象として読み始め、知的興奮のあまり、眠れなくなる。その点、辞書は、項目が小分けされているので、ダラダラと読み続けるという恐れはない。

嬉しいことに、眠れない夜のための英語辞書がまた一冊増えた。研究社から『リーダーズ英和辞典 第3版』が出版されたのだ。英語で食べていこうとする人なら、少なくとも一冊はもっている、権威ある英和辞典の全面改訂版だ。第3版まえがきに眼を通すと、旧版に比べて収録項目数が約1万増えたと書かれている。また、旧版の訳語が原語の意味にどれだけ肉薄しているのか、さらには現代日本語として適切であるのかも検証しながら、改訂したとのこと。辞典編集者の偉業に圧倒されるばかりだ。

最後に私なりの英和辞典の読み方をひとつ。英語化した、日本語単語を見つけることは結構楽しい。新版には“karaoke” “tempura” “sukiyaki”という馴染みの単語に加えて“umami”(旨味)という言葉も新たに加えられている。辞典の中でも異文化交流が起こっているのだ。

熊本県立大学 アーカイブズ



Fourteen Weeks in Descriptive Astronomy (1873) 記述的天文学-14週

本学図書館所蔵の図書。L.L.ジェーンズが熊本洋学校で教科書に使用したと伝えられている。多くの自然科学、歴史学等の教科書を著した米国の教育者Joel Dorman Steeleによるもので、同様の教科書がW.E.Griffithにより福井藩校明新館、東京の南校(後の東京大学)でも使われ、米国ラトガース大学Griffith Collectionに展示されている。口絵は1845年ロス卿によってアイルランドに設置された口径1.8mの巨大反射望遠鏡。建物の高さは15mを超え、銀河星雲の観測をはじめ近代天文学の発展に繋がった。

解説:学長(環境共生学部 教授)古賀 実

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502 (住所記載不要)
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行:熊本県立大学

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929(代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>

再生紙を使用しています

